

Monthly Report

Vol.48 / 2010 May.

カーニ应用科学大学との共同研究がスタート



本学とカーニ应用科学大学（フィンランド共和国）の国際共同研究「高齢者の健康・体力に関する日本人とフィンランド人との比較研究」が始動しました。この研究は日本人とフィンランド人の運動習慣をもつ65～74歳までの男女100名の体力測定・血液採取等を行い、両国間の比較考察を行います。生活や運動処方改善のための基礎資料を得ること、健康や体力づくりの推進に貢献することを目的としております。本学では以前に中国の東北師範大学と同内容の共同研究による研究成果を得ており、今回の研究により3国間比較も可能となります。

具体的には宮城県及び柴田町など近隣市町村の協力を得て基礎データを収集します。5月20日（木）には、柴田町で主催する「体力づくり教室」の中で、40名の町民の方々に被験者となって頂き、第1回目のプログラムとして体力測定が行われました。両国で同一の測定方法をとるために、カーニ应用科学大学の講師と看護師の2名が来日し、測定法の確認も行われました。

当日は東日本放送、宮城テレビ放送、河北新報社、朝日新聞社、産経新聞社が取材に入り、紹介されました。

目次

カーニ应用科学大学との共同研究がスタート	1
特集 補助金獲得事業紹介「筋電図計測装置」	2
英語でスポーツを語るキャンパス創り	3
仙台国際ハーフマラソンのミンスク市選手団	4
短期留学報告会	5
仙台大学体育祭 永年勤続者表彰	6
ボランティア研修講座 JICA世界の笑顔のために	7
学生の活躍	9

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

また、本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室

直通 0224-55-1802

内線 佐藤美保 256

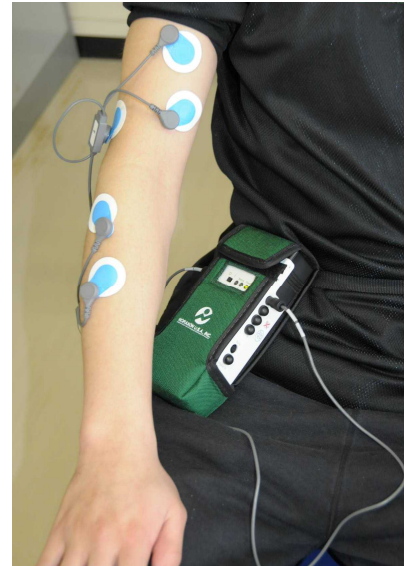
土生佐多 200

伊東宏之 271

Email:kouhou@scn.ac.jp

特集 - 平成21年度文部科学省補助金獲得事業紹介 -

笠原講師が中心となり、平成21年度私立大学等研究設備整備費等補助金を獲得した「筋電図計測装置」を紹介します。



筋電図とは、活動中の筋肉が発生する電位を推定し、筋活動量、筋活動パターンの解析によって、各動作に必要な筋力を推定しながら、個々の筋肉の役割を分析するための機器です。医療分野やスポーツ領域においても損傷を受けている筋肉を推定し、回復に最適な治療を処方するなど、様々な分野における活用事例が報告されています。

従来の筋電計は固定式で、動作が複雑化するほど計測時におけるノイズの混入が大きくなり、データの信頼性が保障されないという問題点がありました。更に、筋電図の波形と動作との連動が難しく、「健常者と障害者の動作の比較」、「回復状況の比較」、「トレーニングの

効果」など、対象者に負担をかけずに簡易的な方法で比較する事が困難な場合が多いことも指摘されていました。

今回、導入した筋電計は「テレマイオG2」という無線式のもので、筋電計のデータを信号で飛ばし、最大で100m以内での計測が可能です。そのため、対象者を拘束せずダイナミックな動作でも解析が可能で、諸動作と筋肉の活動を多角的に評価・解析する事ができます。なお、無線式の筋電計はビデオカメラとの連動も可能で、カメラに映し出された動作と筋電図の波形がモニターで確認でき、筋電の波形から筋肉の活動状況が一目で理解できます。

今回の導入により、介護福祉士の教育ツールとしてや、介護予防や健康増進の現場で、「一人ひとりの能力に適した運動プログラムの立案とその検証」、「新しい運動プログラムの提案」、「安全で安楽な介助方法の提唱」などが期待されています。既に学生が卒業論文で筋電計を利用しており、今後も積極的な活用が期待されます。

製品についての詳細は下記URLをご覧ください。

<http://www.sakaimed.co.jp/service/medical/pdf/a80telemetry2.pdf>

次号でも平成21年度補助金を獲得した設備を紹介予定です。



従来の固定式筋電計

「English Movie Nights with Marty」開催中 ～ 英語でスポーツを語るキャンパス創り ～



写真は、5月10日第2回「Hoosiers」後の学生の様子

毎月第2月曜日19:00からキーナート先生の居住マンションの映写室で、教職員向けの英語による映画鑑賞会が開催されています。学内においても、学生/教職員向けに毎月第2火曜日16:00から、キーナート先生が選んだ英語字幕つき「スポーツ映画」を放映し、キーナート先生と一緒に英語でディスカッションする企画がはじまっています。

5月10日(火)には、B203教室で第二回となる映画鑑賞会「Hoosiers」(高校のバスケットボールチームに就任したコーチと、インディアナ州の田舎町の人々の織り成す実話に基づくストー-

リー)が開催されました。音声も字幕も英語で鑑賞するので日本語に頼らず、目と耳を鍛えながらストーリーの全体像を掴んでいきます。

「英語で語るキャンパス創り」を目指す本学にとって学生の英語力アップを促すよい契機になりそうです。

映画鑑賞後、キーナート先生から「気になるフレーズなどありましたか?」との質問に、果敢に英語で受け答えする学生の姿もありました。ご興味のある先生方、職員のみなさんも是非一度、ご参加されてはいかがでしょうか。また、学生へのお声かけもよろしくお願いたします。

次回の教職員向け映画鑑賞会は、

6月14日(月)19:00～

キーナート先生宅マンションの映写室にて
(申し込みはキーナート先生まで)

学生/教職員向けは、

6月15日(火)16:00～ B203教室にて
(申し込み不要)

「Friday Night Lights」(アメリカフットボール)が開催されます。

健康づくり運動サポーター資格取得ガイダンス



5月10日(月)F303教室において健康づくり運動サポーター資格取得ガイダンスが開催されました。この取組みは体育大学の特徴を活かして、地域の健康指導者不足の解消と健康福祉分野の専門知識を持った楽しい運動指導ができ

る人材養成を目指すものです。平成19年度には優れた教育プログラムとして文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラムに採択(3ヵ年)されました。3年が経過したことにより、プログラムが終了し、今年度より国の補助金はいただけませんが、大学の特徴ある取組みとして継続して活動していきます。

昨年度から健康福祉学科の1年生の講義に必修科目として入れたため、この日のガイダンスは健康福祉学科1、2年生以外の学科・学年を対象に開催され、約100名の学生が参加しました。

ガイダンスでは、はじめに事業推進責任者の橋本教授より健康づくり運動サポーター事業について説明があった後、養成企画担当責任者の小池教授より養成プログラムの詳細が説明されました。

ベラルーシ共和国・ミンスク市選手団団長が来訪



5月7日(金)に過日行われた仙台国際ハーフマラソンのミンスク市選手団長ヴァリス・A・ワシレフ氏が仙台市職員、宮城県ベラルーシ協会会員の方と共に本学を訪れ、関係教職員と今後の交流についての協議と、施設見学を行いました。ベラルーシ共和国の国立体育・スポーツ学院と本学は平成14年に国際交流協定を締結しており、6月には新体操競技部が同国を訪問して練習に参加することになっています。

なお、法人事務局主導で今年も仙台国際ハーフマラソンに協賛し、協賛CMが6回放映されました。

仙台国際ハーフマラソン大会

5月9日(日)、仙台市内において、第20回目となる「仙台国際ハーフマラソン大会」が開催され、国内外からの招待選手や市民ランナーら過去最高の1168人が出場し、新緑の杜の都を駆け抜けました。

この大会には、新体操競技部のマカロアコーチの出身であるベラルーシ共和国の首都ミンスク市からも参加、男子39位、女子17位と大健闘でした。

大会後には、江陽グランドホテルにおいて、交流会が行われ、各国との親睦を深めました。



(新体操競技部 大山・丹羽)

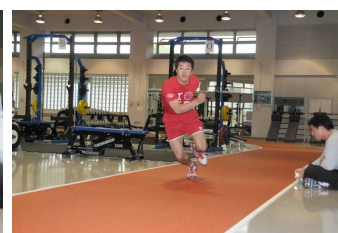
NSCA運動能力テスト出場者が決定



ハングクリーン



10ヤードダッシュ



プロアジリティー



垂直跳び

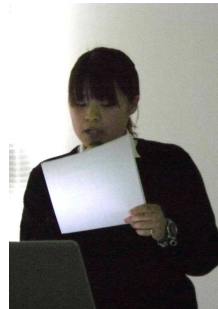
7月15日、米国オーランドに各国の19歳以下の代表が集まり運動能力が競われる「NSCA運動能力テスト」に、出場する2名が決定しました。学内選考会で出場権を勝ち取ったのは、4種目(垂直跳び、プロアジリティー、10ヤードダッシュ、ハングクリーン)の総合得点でトップ記録を出した、バレーボール部に所属する水野竜馬さん(体育学科2年)とB.L.S部所属の米倉理絵さん(運動栄養学科2年)です。

2人は7月13日に鈴木省三教授、加賀新助手と共に渡米し、日本代表として15日の大会に臨みます。

種目の詳細についてはNSCAのホームページを映像をご覧ください。昨年の様子を紹介しています。

<http://www.nsca-lift.org/fly%20solo%20program/internationalpromo.shtml>

海を越えて輝く学生達 Spring 2010 ～ 短期留学終了 フィンランド・カヤー二応用科学大学 ～



5月13日(木)F101にて、フィンランド・カヤー二応用大学への短期留学報告会が開催され、朴澤学長、キーナート副学長、勝田体育学科長、山内スポーツ情報マスメディア学科長他、総勢25名が参加しました。

今回で5回目となる同大学への短期留学は、3月12日～4月13日までの約3週間にわたり、スポーツ情報マスメディア学科3年の高橋悠(たかはし ゆう)さんが果敢にも一人でチャンレジしたものです。

最初に、鎌田国際交流センター長から本学とカヤー二応用大学との交流の歴史について説明され、次に今回引率者の一人としてカヤー二を訪れた森先生より、滞在中の主な出来事に関し、報告がなされました。

高橋さんは、留学の目的や概要を「英語」で作成した資料に基づき、「英語」でプレゼンテーションの前半を行うなど、異国の地での奮闘ぶりに参加者一同が聞き入りました。フィンランドに到着した翌日には、カヤー二市の西部に位置するオール市で行われたフィンランド最古のクロスカントリースキーレースを、

オール市の副市長など幹部の方々と観戦したり、ホームステイ先で子供達に箸の使い方を教えるなど、高橋さんは新しい経験を重ねる一方で、日本ならではの文化を紹介する担い手にもなったようです。

出席した先生方から「英語」で「日本とフィンランドのスポーツに対する考え方の違い」や「仙台大学の授業との違い」等が質問されると「日本では一つの競技に特化するが、フィンランドではそれぞれがいろいろなスポーツに自由に親しむ」「カヤー二応用大学では少人数クラスのせい、学生がとても積極的で、一人が返答すると他の学生がさらに反応し、学生同士のディスカッションが活発である」と答えていました。



最後に朴澤学長より「今回は報告をする方も聞く方も「英語」で実施するという点で、従来に比べ変化が見られ、「英語でスポーツを語るキャンパス創り」の影響が出てきていると思う。日本人も国際化社会において、どこでも活躍できるようになるべき」とのお話がありました。

事業戦略室から「留学に興味がある学生は、いつでも国際交流センターか事業戦略室へおいで下さい」の言葉で締めくくられた報告会。高橋さんは今後、本学を1年間休学し同大学へ留学することを予定しているそうで、スポーツ情報マスメディア学科の学生らしく、自らを世界へ発信する未来にますます期待が深まります。

中国からの研究生 趙 梓淇さん



5月6日(木)に趙 梓淇さん(写真:右)が来日し、7日に朴澤学長を訪れました。梓淇さんは吉林工商学院卒。日本語を学ぶため今年度は研究生として在学し、来年度から大学院に入学予定で

す。はとこにあたる趙 倩穎さん(写真:左/大学院1年)が、大学院事務室の伊藤室長に相談したのがきっかけとなり、来日に至りました。

梓淇さんは日本にとっても興味があり、知識を増やすためにしっかり学びたいと話しています。丸山研究科長の研究室に決まり、日々猛勉強中です。

日本語は勉強中ですが、学内で見かけた時は声をかけてみて下さい。

第2回 仙台大学体育祭



5月22日(土)に「第2回仙台大学体育祭」が第一・第二体育館を会場に開催され、新入生約350名と2年生以上の有志チーム約40名が参加し、3競技(バレーボール・ドッチビー・2人3脚リレー)で熱戦が繰り広げられました。このイベントは昨年から学友会が中心となり開催しているもので、新入生同士の交流を図ることで、クラスや部活単位の交友関係の構築だけでなく、幅広い交友関係を築いてもら

う事を目的に実施されています。競技終了後には学生食堂において立食会も行われ、交流を深め合う良い場となったようです。

なお、体育祭開催にあたり、ベガルタ仙台やシダックス、マーティ・キーナート副学長から楽天ゴールデンイーグルスの観戦チケットやグッズなどの提供をいただきました。好成績により賞品を獲得したチームは、思ってもいなかったBIGプレゼントに大感激の様子でした。

永年勤続者表彰



5月10日(月)に法人事務局において永年勤続者表彰式が執り行われ、朴澤理事長より表彰状と記念品が贈られました。永年勤続者表彰は、本学園で25年勤続した方に贈られるもので、仙台大学では今年、5名の教職員が対象となりました。

<被表彰者>

鈴木 省三 教授
 森 茂利 教授
 小松 恵一 教授
 大和田 寛 教授
 川村 隆 図書館課課長

第70回学術集会



発表者	テーマ
小澤輝高教授	細胞内カルシウム放出とその役割
山口貴久講師	スポーツにおける膝蓋大腿間接障害の研究について
吉井秀邦講師	過去・今後の研究活動について
笹生心太講師	ボウリングブームを社会科学で斬る
近藤貴美子助教	健康づくり運動サポーター事業参加学生の現状と課題 (健康運動指導士受験資格取得希望者との関連を含めて)

5月18日(火)にA棟大会議室において第70回学術集会が開催され、教職員・新助手・学生36名が出席しました。その中で4月に着任した新任教員から、これまでの活動報告と研究発表があり、教育・研究活動に対する意欲的な姿勢を垣間見ることができました。

平成22年度 ボランティア研修講座開催



4月28日と5月12日、平成22年度のボランティア研修講座が開催されました。本学では、地域の施設や教育委員会などからの要請を受け、ボランティアセンターが窓口となりさまざまな学生の派遣を行っています。本学の学生は各種施設、指導員や教員志望の学生も多く、このボランティア活動の実践により、小学生から高齢者まで沢山の「異世代」の方々と触れ合う経験ができ、多くの学びを得られる機会でもあります。また「ボランティア活動実践A・B・C・D」の科目履修登録をし、必要条件を満たすことにより単位としても認定されます。しかし、単位取得を目的とせず、多くのボランティア活動を行う学生も多く、毎年約500名の学生が登録して活動を行っています（今年度は5月12日現在、220名の学生が登録完了）。研修でははじめに、学生支援センター長の大山先生の挨拶があり、平成13年度に障害者スポーツ大会へ本学から300名の学生ボランティアを派

遣したことを契機に学生からの要望が高まり平成15年にボランティアセンターが発足したことや、活動を通じて「感動」をより多く感じ取ってほしい。との挨拶がありました。ボランティアコーディネーターの南條さんからは、ボランティア登録の手続き方法について、庄子幸恵先生からは、活動に当たって学生が注意すべき約束事やマナーについての話がありました。また、国際貢献事業の一環として、4年目となるJICAボランティア「世界の笑顔のために」のスポーツ用品等の募集プロジェクト（5/17 5/31まで）の説明を学生ボランティアスタッフの佐々木里花さん（スポーツ情報マスメディア学科2年）が映像とともに呼びかけました。

さらに、今回の研修には、東北福祉大学生3名が「おおさき100km徒歩の旅（大崎市の小学4～6年生100名対象事業）」のボランティア募集のPRに訪れ、彼らから「活動を通じてところを開くためには、まず自分のところを開いて寄り添う気持ちが大切。」と昨年の子どもの旅の映像と熱いコメントが寄せられました。本学の学生からも、説明会后に活動の様子を聞く姿がみられ、良い刺激になったようでした。ボランティア研修講座は、今後も登録者の増加に応じ、適宜開催していく予定です。登録者は必ず受講するようお願い致します。



JICA「世界の笑顔のために」プログラム



JICAが主催している平成22年度第1回「世界の笑顔のために」プログラムがスタートしたことに伴い、本学でも学生支援室ボランティアセンターが窓口となり、学内で不要になった物品（特にスポーツ用品）を募集しています。

このプログラムは開発途上国で必要とされて

いる教育・福祉・スポーツ・文化などの関連物品を日本国内で募集し、JICAがボランティアを通じて世界各地へ届けるプログラムです。本学でも柳講師の提案により平成19年度から活動に参加し、これまでバレーボール用品、ソフトボール用品、野球用品、サッカー用品、陸上競技用品、剣道用品などの物品を提供し、ベナン共和国やニジェール共和国など各国から御礼状が届いています。物品回収は既にスタートしており、学生ボランティアスタッフがPR映像やポスターを制作して物品提供を呼び掛けています。今月31日(月)まで行っておりますのでご賛同いただける教職員・学生はボランティアセンター（内線：258）までご連絡下さい。

< 学生ボランティアスタッフ >

横山宗平、阿部早紀子（健福3年）
加藤和宏、久保田侑樹、佐藤翔哉（運栄3年）
佐々木里花、槻山朋恵（スポ情2年）

ペットボトルキャップ送付について



5月11日に、NPO法人エコキャップ推進協会に対して、第7回目となるペットボトルキャップの送付を行いました。今回の送付数は13,200個で、本学からの送付総数は53,600個になりました。これは422.1KgのCO₂の発生を抑制し、途上国の子供67人にポリオワクチンを、BCGなら191人に接種させることができる量に相当します。

学生が集うKMCHの自動販売機前に設置した「協力ボックス」に集まったキャップ1600個をこの協会へ送付したことをきっかけに、事務

局が中心となって結成した「地球温暖化プロジェクトチーム」が賛同し学内全ての建物内に協力ボックスを設置して、この活動を推し進めています。

NPO法人エコキャップ推進協会はペットボトルキャップ収集事業を行い、キャップをゴミとして償却するのではなく再資源化を促進することで、焼却処分に伴うCO₂の発生を抑制し資源化で得た売却益で「世界の途上国の子どもたちにワクチンを寄贈し救済する」ことを目的とした活動を実施しています。

学内でエコキャップ運動を始めた日(KMCH内にキャップ回収ボックスを設置した日)が昨年4月21日でしたので、一年強での活動実績です。1年間、学生・教職員の皆様のご協力に感謝します。今後とも引き続きご協力をよろしくお願いします。

HPで先日(5/11)送付分の実績が確認できます。

<http://ecocap007.com/>

本学卒業生の活躍

- 11回生 宮崎 真彰さん、4月より北海道標津高等学校 校長に -

北海道標津高等学校校長に就任された宮崎真彰さん(昭和57年卒)から、丸山研究科長へ着任のご挨拶状がとどきましたのでご紹介します。本学在学中は、ラグビー部キャプテンとして活躍した宮崎さん。

本学の卒業生で高等学校の校長職に就任されるのは、初めてのことです。

昨年12月に開催された札幌近郊同窓会には80名もの同窓生が集結し、仙台大学へ熱いエールをおくってくださる「北海道地区同窓生」の一人でもあります。今後も、仙台大学同窓生としてご尽力いただければ大変ありがたいです。

また、宮城県内においては、佐藤純一先生(7回生)、村石好男先生(11回生)、佐藤一紘先生(12回生)の3人の先生方がめでたく小・中学校の校長職へ就任され、今年も12回目となる「仙台大学同窓生の校長ご就任を祝う会」が、6月25日にKKRホテル(仙台市内)において同窓会事務局が中心となりお祝いする予定です。

謹啓 うららかな日差しに春を感じる季節となりました。皆様にはますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、私ごと

この度、北海道標津高等学校勤務を命ぜられ過日着任いたしました。

北海道札幌高等養護学校在任中は、皆様の御支援御指導をいただきながら、卒業後の社会生活を見据えた高等養護学校の教育活動についてたくさんのご意見を教えていただいたこと、心から厚くお礼申し上げます。

生徒の成長を支えるために、保護者、地域、関係機関、教職員の皆様とつながりあった日々を糧に、新任地におきましても職務に誠心誠意努力する所存ですので、今後とも一層の御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら、皆様の御健康と御活躍をお祈り申し上げ、お礼と着任のあいさつといたします。

謹言

平成22年4月

〒086-1652

標津郡標津町南2条西5丁目2-2
北海道標津高等学校



宮崎 真彰

校長になりました。卒業生にも仙台大が
いるようです。

夢のメジャーリーガーに挑戦するために渡米を決意 色川冬馬さん

色川冬馬さん（スポーツ情報マネジメント学科3年）が渡米し、米国カリフォルニア州で行われるサマーリーグに参加することが決まりました。チームはMarysville Golden Soxというチームで、ほとんどの選手は大学生で学校の夏休みを利用して参加しています。そこに色川さんがマーティ・キーナート副学長の紹介もあり、参加することになりました。

メジャーリーガーになることを望んでいる色川さんは、昨年から米国でのトライアウトに参加し、今年も1月に米国西海岸南部で開催されたアリゾナ ウィンターリーグにも参加しました。そこでの活躍が基本的には評価され、キーナート先生の友人が経営するこのチームメンバーになることが決まりました。

このチームはどこの独立リーグにも所属せず、ホームに相手チームを迎えて試合を開催しています。試合数は40ゲームほどで、5月27日から8月8日までシーズンは続きます。

色川さんはこのチームに参加するために1年間休学することを決めました。アメリカでプレーしていればチャンスが生まれることを知っている彼にとって、アメリカで野球をする環境ができたことは第一関門突破というところです。

この様子はテレビ局1社と新聞社5社からも取材を受け紹介されました。



仙台六大学野球応援バスツアーを実施



4月10日（土）に開幕した「仙台六大学野球春季リーグ戦」の応援バスツアーが昨年に引き続き企画され、5月8日（土）、9日（日）の両日で延べ40名の学生が参加しました。対戦相手は本学と近年、一進一退の緊迫した試合展開を繰り返している東北学院大学で、悲願の

リーグ優勝を目指し、互いに負けられない試合でした。

2試合ともに1点差ゲームで1勝1敗という緊迫した好ゲームが繰り返され、野球場に入ったのがはじめてという学生もおりましたが、目前で飛び交う打球のスピードに気持ちが高ぶっている様子で、大きな声で選手を後押ししていました。

バスツアーでは体育学科マネジメントコース学生の授業（イベント企画）の一環として企画され、乗客を安全・安心に目的地に送り届けるように休憩場所や食事場所を計画立てて行われました。



全日本体操競技選手権大会結果



5月8、9日に国立代々木体育館を会場にして個人総合で競う全日本体操競技選手権大会が開催されました。この大会は、6月のNHK杯と共に世界選手権（10月開催）とアジア大会（11月開催）の代表選考会に位置づけられている国内最高峰の大会です。

84名にしか出場資格が与えられないこの大

会に、本学からは参加資格をクリアした6名（過去最多）がエントリーしました。NHK杯に進めるのは今大会の上位36名だけで、安定した演技で全体の19位に入った石原大さん（体育学科2年）と、順位は33位ながらも初日の「ゆか」、「跳馬」で全選手の中で2位の成績を残した宗像陸さん（体育学科2年）の2人が出場権を獲得しました。NHK杯の頑張り次第ではまだまだ代表となるチャンスはあります。この他、富沢祐太さん（体育学科2年・明成高校出身）が全体の38位につけ、欠場者が出た場合に出場するリザーブにまわりました。

大会は北京オリンピック銀メダリストの内村航平選手が優勝。本学OBの植松鉦治選手（KONAMI）が得意の鉄棒で2日共にトップの成績をおさめ、2位となりました。

体操の東日本インカレで宗像 陸さんが種目別：跳馬 優勝



写真提供：阿部ちはるさん（スポ情4年）

5月14 - 16日に栃木県体育館を会場にして行われた東日本体操競技選手権大会（東日本インカレ）において、宗像陸さん（体育学科3年）が種目別：跳馬で優勝。種目別：ゆかでも

2位記録を出し、個人総合で4位となりました。

団体戦では男子が2位となり、選手層の厚さを証明してくれました。

【個人総合】

第4位 宗像 陸 、第15位 亀山耕平
第13位 富澤祐太 、第16位 寺田有佑
第14位 石原 大

【種目別】

<跳馬> 第1位 宗像 陸
第7位 石原 大
<ゆか> 第2位 宗像 陸
<あん馬> 第5位 亀山耕平
第6位 佐藤 亘
<つり輪> 第6位 佐藤 亘
<鉄棒> 第7位 富沢祐太

やり投げの佐藤寛大さんが今年度日本ランキング第2位



5月14 - 16日に仙台陸上競技場で行われた東北学生対校選手権において、やり投げの佐藤寛大さん（体育学科4年）が75m98の自己新記録で2連覇を果たしました。今年度、日本ランキングも自己最高の2位とし、世界陸上競技選手権大会の参加標準記録Bまであと2mに迫りました。佐藤さんは6月6日の日本陸上競技選手権大会への出場も決まっております。佐藤さんは6月6日の日本陸上競技選手権大会への出場も決まっております。佐藤さんは6月6日の日本陸上競技選手権大会への出場も決まっております。佐藤さんは6月6日の日本陸上競技選手権大会への出場も決まっております。

柔道部の深谷実紀さんがフランスジュニア国際44kg級優勝



5月15 - 16日にフランス・リヨンで行われた柔道の2010フランスジュニア国際大会において44kg級日本代表の深谷実紀さん（体育学科1年）が初優勝しました。

試合内容に本人は納得していないそうですが、初の国際舞台で優勝という結果を残したこと自体素晴らしい快挙です。

1回戦：延長戦 / 指導3 キャレン（フランス）
 2回戦：一本勝ち / 小内刈 バーロット（フランス）
 準決勝：有効・優勢勝ち エルデヴェント（フランス）
 決勝戦：一本勝ち / 袈裟固 ホーク（フランス）

5月25日（火）には朴澤学長に優勝報告を行いました。

男子バレーボール部が東北大学春季リーグ優勝



男子バレーボール部が第37回東北バレーボール大学春季リーグ戦で優勝しました。

男子バレーボール部は昨年の秋季リーグで13年ぶりのリーグ優勝を果たし、勢いそのままに今大会では全10試合で落としたセットが1つだけと、他チームに流れを譲らない試合運びでした。

ベガルタ仙台ジュニアサッカースクール仙南校1期生が本学に



ベガルタ仙台と本学は2002年から小学生を対象にした「ベガルタ仙台ジュニアサッカースクール仙南校」を開校しています。今年初めて、このスクールの卒業生の中から本学学生が誕生しました。サッカー部に所属する日野竜馬さん（体育学科1年）で、ベガルタ仙台ジュニアサッカー

スクール仙南校の第1期生です。当時、小学5年生だった日野さんは、コーチとしてサッカーの楽しさを教えてくれた草野新助手のこともよく覚えているそうです。

日野さんは大河原町出身。身長183cm、体重70kg。小学1年生からサッカーをはじめ、小学3年生からベガルタジュニアスクール太白校に通い、小学5年生の時にできたことで仙南校移ったそうです。中学時代はベガルタ仙台ジュニアユースに所属、高校はサッカーの強

豪校である東北高校に進学して全国大会の舞台を3度経験し、大学は地元の本学に進学しました。

日野竜馬さん

「以前から仙台大学サッカー部は東北でズバ抜けて強いという印象でした。先輩との変な上下関係もなく、チームの雰囲気はとても良いです。今はレギュラーを獲るために当たり負けしない体をつくるのが課題です。また、入学後にジュニアスクールのコーチをさせてもらっています。自分の基礎を築き、育ててくれたジュニアスクールで、今度は指導する側としてかわり、子供たちにサッカーの楽しさを伝えていけたらと思います。」

